

はくがんさん

護ってきた

第115号令和2年秋号

伊豆市 法住寺 発行

一〇月二十四日お会式、新型コロナウイルス予防のため、例年とは違ったが護持会役員さんと十二日講の皆さんで、日蓮大聖人に報恩感謝を申し上げることが出来た。

法要の前には万灯講の白龍会が、こんな時だからこそウィルス終息を祈り行脚しようと、ふる里白岩にお題目の太鼓を響かせて元気を頂いた。秋晴れの晴天、まことに清々しいお題目、南無妙法蓮華経そのものであった。

* お会式法要後は護持会事業・会計報告が

「寿量の祈り 敬意と感謝」

大自然 ありがとうございます。合掌
社会の皆さん ありがとうございます。合掌
ご先祖さま、家族の皆さん ありがとうございます。合掌



れた寺でも酷暑に配慮しなければならぬ。こうした機器を設置使用できるのも、檀家さんや信者さん方に支えられているから出来ることである。ありがとうございます。

*



新型コロナウイルスの影響で各種会合等がなくなり、静かに本が読めたり、じっくり考えたりできている中で、改めて法華経

行われ、

本堂にエアコンを設置したこと等が報告された。夏は自然の風と扇風機と思ってきましたが、田舎の樹木に囲ま

って凄いなあと思っている。

お釈迦さまが法をお説きになった後、孫悟空でおなじみの三蔵法師のような方が命がけて幾多の困難を乗り越えインドに渡り、もの凄い年月をかけて中国に持ち帰った。これが翻訳できたのは紀元後四百年の頃、鳩摩羅什(くまろじゅう)が苦難の末に成し遂げた。それから一六〇〇年、私たちは法華経を手にすることが出来る、よく伝わったものだなあり、すごいなあり、感慨深い。『自我得仏来 所経諸劫数 無量百千万 億載阿僧祇 : (妙法蓮華経・自我偈)』まことにリズム感良く美しい。

今年の初夏、朝のお勤めでお経の一字一字が輝いて目に飛び込んできた、誠に不思議なことだった。想像を絶する困難を乗り越え伝えた信心、気の遠くなるような翻訳の情熱、そうしたご本仏と一体になり切った先師の魂が、一文字一文字となって飛び出してきたように想う。中国では時代が替わると価値観が大きく変わってしまうことが多い中で、天台大師が法華経を伝え深め、荒波の大海を乗り越えて日本に渡り、伝教

大師、日蓮聖人と伝わった。その後も幾多の困難の中、お弟子たちや信者さん方が護り伝えて、今、私たちは法華経を手にする事が出来る。

*

「何のために、どこに向って生きているのだろう」、変化の激しい時代、そんな自問も出てくる。迷い苦しみ答えは出てこない。それでも混濁の中に少なくとも一つは輝くものが見えてくる。それは幾多の困難を乗り越え伝わってきた法華経を、檀信徒の皆さんが護持していると云う輝きである。法華経の逐一は解らなくても、ご先祖さまはお寺を護って下さった、皆さんは今年もお寺を護持した、それは法華経の大きな流れに連なったことにほかならない。自信と誇りであり、行く道を示してくれている。経済的な価値観では十年後を見通すことは出来ないが、法華経は百年後、千年後も伝わると思う。それは法華経が大自然、大宇宙の真理を説いているからで、だからこそ幾多の困難を乗り越え数千年間も伝わって、今、ここにあるからである。

お寺の庭に花いっぱい

昌子寺庭の山務日誌より

それは秋のお彼岸に入った日のことだった。亡くなったおじいさんのお墓参りにみえるご家族(おばあさん、娘さんと孫二人)が、今日も玄関にご挨拶にみえてくれた。男の子が「あのお」と何か言いたげにしている。

すかさず側に居たお母さんが「この子が聞きたいことがあると言うのですが、よろしいですか」と言葉を添えた。

「どうぞ」と答える私に少年は「あそこにあった木はどうしたんですか？枯れちゃったんですか？」と訊いた。その瞬間、私は胸がズキンとした。こんな小さな子供が境内のあの枝垂桜を覚えていてくれたことに。そしてもう二度とそこには無いことに。

(桜の木の足元に野の花を植えていた私は、幾つかの枯れる原因の一つにそれがあつたのでは：と、本当に申し訳なく思っていたのでした)「そうなの。あの木は枯れてしまつて、それでねお経をあげてから切つたんだよ」と言うのがやっとなつた。一緒に居

た人たちも「なかなか気づかないよね」、「お経をあげてから切つたんだって」等々言っていた。その時私はあるものがあつたことを思い出して別室に走った。「あのね。あそこにあつた桜の木で作つたんだよ」と桜の置物を玄関に持って来て少年に見せた。そして「さわってみて。覚えていてくれてありがとうって言ってるよ」と言った。私はと少年の純粋な桜の木への想いに深く満たされながら少年を見送った。

*

あの少年の感性はどこからくるのか。思いを重ねていくうちに、折々で家族共にお

墓参りを重ねてきたことが、何時しか少年の心を育み、今はもう無いあの桜の木が少年を慈しんでいたのだとの想いに至つた。



ライブ配信で

身延山輪番奉仕(9月13日)

毎年行われて



いる身延山輪番奉仕、今年はライブ配信して行われました。輪番奉仕とは、身延山に建てられた日蓮聖人の御廟を、直弟子六人の高僧(六老僧)が月ごと交替でご給仕してきたことに

始まります。この故事にならい現在では全国の檀信徒が年間を通して身延山に登りお詣りご奉仕しています。

副住職は宗務所員として全国初めてのライブ中継で準備、当日と動き回っていました。当山檀信徒さんも五〇人余も参加して下さり、「見た、見た。良かったねえ」などの声を頂きました。

宗務所では五〇〇人近い方の参加があり「感激しました。こういう形でも輪番奉仕に参加できてよかった」、「来年は身延山で営めるように祈りました」等たくさんの方がよせられました。

新年正月の参詣

お正月には新年のお詣りご挨拶を頂いており、令和三年新年もお詣りお願い致します。新型コロナウイルスの為、書院でのお屠蘇等は控え本堂でのお詣りとなります。昨年一年間の感謝と新年の無事を祈願し、ご先祖さまにお詣りをお願い致します。



だからJN

今、新型コロナウイルスの影響で起こる様々な変化。今まで出来ていたことが出来ないことに何か閉塞感さえ感じることもあります。この現状を心の自分勝手フィルターを通すと「まったく嫌だ嫌

だ」のピンチに映る。「柔軟」な仏さまフィルターで見ると何かを見直すチャンスに映る。

野球の試合でいうなら巨人対阪神で阪神が勝つ。すると阪神ファンは良い試合だったと喜び、かたや巨人ファンはガッカリ。どちらのファンが見ても、その試合で起こることは同じ、結果も同じなのに。どう捉えるか、どう見るかって本当に大事です。

*

さてここ法住寺でも世間と同じように行事の縮小や中止など感染予防に気を配りながらの時間が流れています。毎年の御会式では万灯講白龍會が万灯行列を奉納します。纏を振り、太鼓と鐘をならし、威勢のいい掛け声がこの山に響きます。しかし今年はやはり万灯行列は難しい、中止するしかないかと考えていた時のことです。以前に七面山登詣で一緒に滝行をした檀家役員さんが「確か

に今の状況では万灯行列は出来ないかもしれない。でも今だからこそ、我々には何か出来ることがあるのではないか？」の一言。しかも「こんな時だからこそお題目を唱え白岩の地域を行脚するのはどうだろう？ 最大限の予防をしながらお題目を唱えて新型コロナウィルス終息を願おう。檀信徒と白岩の皆さんが、こんな時だからこそ少しでも気持ちがあ上を向くようにお題目行脚しないか」の熱い提案。この言葉、提案はまさに仏さま、日蓮聖人のお言葉だったと感じます。

*

私自身、世間の多くの変化で「くだか

御志納金「七月〜九月」

清水 小塚健治殿 尊母葬儀砌
小川 室野好信殿 尊父葬儀砌
元村 足立 悟殿 愛妻葬儀砌
清水 土屋正次殿 本堂エアコン設置砌
伊豆の国市 朝倉殿 尊父永代供養砌
伊豆市 大川家 永代供養砌



にこの熱い一言。本当に心に響きました。改めて「くだから出来ない」ではなく、「くだからこそ」の「こそ」をつける大切さを気付かせてもらいました。お陰様で、御会式の日午前中、お題目旗、新型コロナ終息祈願旗を掲げ、白龍會の有志約十五名と気持ちよくそして力強く唱題行脚をさせて頂きました。

この時、皆でお唱えしたお題目は暗闇

ら出来ない「のあきらめフルタ―で物事を見ることが多くなって、いた、その時

を照らす一筋の光です。お題目は目で見る文字、耳に聞こえる言葉では「南無妙法蓮華經」。そして「おはよう・ありがとう・ごめんなさい」も実はお題目、私たちの生活の中では様々に形を変えます。だから法華經・お題目は生きたお経なのです。今回の「くだからこそ」の「こそ」もお題目。暗闇のなか、どうしていいかわからない、どう進んでいいかわからない時、お題目はスポットライトとなって私たちの足元を照らしてくれます。そのスポットが幾つも繋がりました。今回行脚という一つの道となりました。それはお題目、仏天の示し教えて下さった道、だからこそ迷うことなく自信を持って行脚することが出来たのです。

この時お唱えしたお題目が、皆さんの心に、「こんな時だから」だけでなく、「こんな時だからこそ」の「こそ」のスポットがさしますことを願っています。